「　すべての子どもたちへの心理的，教育的支援のあり方　」

Ⅰ．主題設定の理由

学校には，いじめ，不登校，暴力行為等の生徒指導上の課題が山積している。教師の体罰により子どもが自殺するという事件も発生し，社会問題にもなった。

これらの背景の一つに，地域での交わりの希薄化，核家族化や子どもの数の減少等，現代の子どもたちを取り巻く状況に，社会性を育むための基盤そのものが弱くなってきていることが挙げられる。また，インターネット社会の到来により，スマホやLINEを使う生活の中から多くの問題も生じており，それが，いじめ，不登校，暴力，自死等の問題の温床になっているという面も指摘されている。

そんな中，他者との関わりに臆病になったり，苦手意識をもったりしたままに学校生活を送る子どもや，学校が楽しい場所ではなくなってしまっている子どもも見られる。

このような現代社会を生きる子どもたち全てを援助しようとする枠組みが，「石隈・田村式援助シートによるチーム援助」（図書文化」）に，子どもの求める援助の程度に応じて，3段階に整理されている。

一次的援助・・・「全ての子ども」への援助
　　日頃の教育活動，開発的・予防的な活動

二次的援助・・・配慮を要する「一部の子ども」への援助
　　子どもの苦戦が大きくなり，子どもの発達を妨害することを予防することを目指す

三次的援助・・・特別に個別の援助を必要とする「特定の子ども」への援助
　　一次的・二次的援助も含まれた総合的な援助

本部会では，ここ数年，一次的援助についての理論研究，実践研究を進めてきた。具体的には，エンカウンター，アサーショントレーニング，ソーシャルスキルトレーニングなどを指導に取り入れ，子どもたちの支援をしてきた。

更に，昨年度と今年度は，「Q-U」アンケートによる学級集団分析を取り入れている。教師の側からの日常観察や面談による児童理解には限界や見とり違いも生じることがある。そこで，「Q-U」アンケートを分析することにより，見取りの限界を補い，「学級内の一人一人の状態」，「学級集団の状態像」「学級集団の状態と個々の児童の関わり」を的確に把握する。そして，その結果を生かして，子ども一人ひとりへの支援や声掛けの方法を工夫し，集団や個へのアプローチの方針を立てる。

子どもたちの心の根底には，「一人の人間として大切にして欲しい」という願いがある。「生きにくさ」を抱える子どもであればなおさらであろう。子どもたちの人として当たり前にもっているその願いに寄り添い，一人一人の生き方への関心に応える指導・支援の在り方を考えていく。

以上のような理由から，子どもたちの基本的人権を尊重する態度を基盤に，問題への予防的・開発的な意図をもって，心理的・教育的支援を行いながら，集団づくり，人間関係づくりを進め，子どもたちの自治の力を育んでいくための研究を進めることとした。

Ⅱ．研究内容

①授業研究・・・中学校へ繋がる自治的な力を育むという構想で，昨年度から２年間継続して実践した小学校高学年の授業研究を行った。

②実践提案・・・部員全員が，実践報告を行い，そこで見出された課題について，意見交換や情報交換を行った。殊に，小・中の実践内容を交流することで，発達段階を踏まえた指導の在り方や小・中の連携の在り方について考える機会になった。

○学習会・・・長田由布紀氏（山梨県教育委員，スクールカウンセラー）による講演会を行った。母子の感情や子どもへの支援と共にある保護者への支援という視点が大変勉強になった。

Ⅲ．成果と課題

１．成果

少人数の部会ではあるが，少人数であればこそ，児童や生徒の状況を出し合い，その中にどの学級にも共通する課題を見つけ，小・中それぞれの立場で考えを述べ合い，熱心に研究することができた。

小学校と中学校それぞれの特性を知り，すべての子どもたちに対して，予防的・開発的にアプローチすることにより，個々の自立を促し，より良い人間関係を形成する力の伸長を目指して研究を進めた。昨年度から，塩山南小学校，堀内美紀教諭の学級（５，６年生）の２年間を継続してみとり，その変容から，予防的・開発的な指導の効果を検証しようと試みた。そして，主に２つの成果を認めることができた。

○同じクラスを２年間かけて追ったことの意義。

「Ｑ－Ｕ」アンケートによるアセスメントと個や集団へのアプローチや構成的エンカウンターを継続して行うことにより，子どもたちに，意図的に好ましい関わり方を経験させ，子どもたちは，他者を意識したり，逆に自分というものに気付いたり，所属する集団に居場所がある安心感を得たりできていることが認められた。

誤解を恐れずに言えば，人間関係に気を遣う傾向が見られる現代の子どもたちにとって，現実世界での経験はあまりに強烈であるので，「仮想の人間関係トレーニング」で疑似体験しながら関わり方を学習することも意義あることである。そのようなトレーニングで培った力を生かして，現実世界で役割を果たし，自己実現したり自己有用感を得たりすることができた。子どもたちの自立を図る手立てとして，本研究の手法は有効であったと言える。

○小学校と中学校の交流の中で研究したことの意義。

本研究部会の求めるものは，子ども参画による創造的で民主的な学級づくり，学校づくり，それを支える生徒指導である。小・中連携した生徒指導を構築するために，それぞれの立場の教師が，情報を共有し，同じ観点で自治的な活動や自立の姿をイメージしていくことは大切である。今年度の授業研究を，小学校に閉じてしまうことなく，中学校でも生きてはたらく力をつけることを意識して行えたのはよかったと思う。

２．課題

これまで特別活動として実践することが多かったが，山梨南中学校の道徳の実践が大変参考になった。全ての子どもへの教育的支援という観点から考えると，今後は，特別活動だけではなく，道徳など心に寄り添う授業の実践を研究に取り入れていきたい。

（　部長　岩森真由美　）